

20 世紀における「きもの」文化の近代化と国際化
—物質文化・表象文化の視点から—

The Modernization and Globalization of Kimono Culture in the Twentieth Century:
An Analysis of Kimono and its Representation in Multiple Media

森 理恵*¹⁺, テリー・五月・ミルハプト*²⁺, セーラ・フレデリック*³⁺, 鈴木桂子*⁴⁺
Rie Mori*¹⁺, Terry Satsuki Milhaupt*²⁺, Sarah Frederick*³⁺, Keiko Suzuki*⁴⁺

*1 日本女子大学家政学部被服学科 文京区目白台 2-8-1
Faculty of Human Science and Design, Japan Women's University,
2-8-1 Mejirodai Bunkyo-ku, Tokyo, Japan

*2 インディペンデント・スカラー
Independent Scholar

*3 ボストン大学近代文学および比較文学部
Dept. Modern Languages and Comparative Literature, Boston University

*4 立命館大学衣笠総合研究機構
Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University
+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract : During the last three years, our research group visited museums, libraries, and private collections located in England, America, and Japan, in order to uncover as much material as possible on our respective, proposed topics. As an internationally-based research group (Kyoto, Tokyo, Boston, and New York) we have been in regular contact, exchanging ideas and opinions among the group, and with other scholars throughout the duration of our grant. At this stage of our research, we offer the following observations, which should be viewed not as our final statement, but ideally as a research-in-progress report, since our topic is a relatively new area of exploration for cultural historians, anthropologists, art historians, and literary historians.

1. Both the meaning of the word “kimono” and the actual garment as it was produced, marketed, and consumed within Japan, vis-à-vis the West, and within the larger Asian region shifted throughout the twentieth century. An array of new forms, techniques, and kimono designs appeared to meet specific consumer demands. Some of the representative examples of changes in kimono for export include: additional panels inserted at the side seams to increase the skirt's flare; new embroidery techniques inspired by Western techniques; and colors and motifs geared to the consumers' taste,

*1) morir@fc.jwu.ac.jp

whether Japanese or foreign. One of our researches extended her study of export kimono to include other Japanese-textile-related products as souvenirs, such as aloha shirts and suka-jan, and regarded their consumer groups (Japanese emigrants to Hawaii and American soldiers in Hawaii and Occupied Japan) as active agents in the construction of a new understanding of these textile products and their meaning in relation to Japan.

2. In addition to viewing kimono simply as garments, our research suggests that a broader approach to the study of kimono reveals that kimono came to be viewed as symbols of Japan. In the United States, England, and Europe, the kimono today is displayed in museums, representative of the genius of Japanese craftsmanship, and is valued more as “art” than as “clothing”. Research on media portrayals of kimono, such as film and magazines that circulated around the world, are filled with images or descriptions of kimono. At certain moments in time, particularly during the Taishō era, the kimono was perceived to be a “modernist” garment both in Japan and in the West, while at the same time it was viewed as a symbol of Japanese clothing within Japan’s colonies in Asia. The kimono is freighted with political and symbolic meaning that extends far beyond Japan’s shores. The dynamic interplay of these multiple perspectives should be considered synchronically, as well as diachronically.
3. One of our research group’s aims was to consider new theoretical approaches in order to contextualize the function and meaning of kimono, not simply in terms of Orientalism, which has previously been considered, but by evaluating what the kimono means when viewed through other lenses, such as cosmopolitanism and colonialism. Depending on when (the Interwar period, WWII, or Occupied Japan), where (Japan, Asia, or Western countries), and a person’s class and gender, the kimono’s meanings continually shift.
4. When viewed from the perspective of an object of material culture, the kimono has been produced and consumed not only in Japan but all over the world, thus moving beyond Japan’s borders (or un-Japanization). Today, global yukata designed by a British firm, manufactured by a Japanese company, and sewn in China, document how transnational the kimono has become. Ironically, despite the fact that kimono’s function and meaning was subjected to multiple changes during the twentieth century, more and more people today identify the kimono as a symbol of Japanese tradition.

要旨:3年間にわたる、国内外の美術館博物館、図書館、個人収集先での調査と、共同研究員相互のディスカッション、外部研究者との意見交換により、次のことが明らかになった。

- (1) 20世紀の西洋やアジアにおける生産・流通・消費をとおして、物質としての「きもの」は、形態、技法、意匠のそれぞれの面において、多様性を獲得した。たとえば、裾にかけて広がるように襷を入れるといった形態の工夫、西洋風刺繍のような技法の開発、そして、受容される地域に合わせた色と模様ของ考案である。アロハやスカジャンといった衣文化も「きもの」の受容の一局面である。

- (2)さらに、このように多様に展開した「きもの」は、着る物としてだけでなく、美術品として美術館に展示されるようになり、映画や雑誌などのメディア上に表現され、イメージとしても流通した。20 世紀における「きもの」文化は、従来考えられていたより、はるかに多様な物質性と表象性を持っていたことが確認できた。
- (3)また本研究では、「きもの」をオリエンタリズムだけでなく、コスモポリタニズムやコロニアリズムの文脈からとらえようと試みた。大正期の国内では、西洋対東洋の枠組みではないコスモポリタニズム的な「きもの」が実践されていたし、植民地では植民者の規範的な文化のひとつとして「きもの」が使用されていた。「きもの」のもつ意味は、戦間期、15 年戦争期、占領期といった時代の変化につれて変化してきたし、日本かアジアか欧米かといった地域によっても、そして、「きもの」を着たり見たりする、各個人の階層やジェンダーによっても、変化しつづけてきたのである。
- (4)物質文化としての「きもの」は、近年とくに、アジアで生産され、国内のみならずアジアや欧米で消費されるといった、脱日本化の傾向が強まっている。ところが、それと反比例するかのように、「きもの」が長く続く「日本の伝統」であるとする誤った考え方もまた、強まってきている。「きもの」が、近代史のなかで大きな変貌をとげたという事実、そして現在、グローバルに生産・流通・消費されているという事実は無視されているのである。

配当決定額

平成 21 年度	1,400,000 円
平成 22 年度	1,200,000 円
平成 23 年度	1,350,000 円
合計	3,950,000 円

研究の目的

日本の「きもの」は 20 世紀に、生産・流通・消費の各段階において、近代化と国際化を達成したと考えられる。これは 19 世紀後半に成立した近代国民国家日本の国際関係の推移を受けたものであり、また、21 世紀である現在の「きもの」文化に連なるものである。本研究は、「きもの」の「モノ」としての物質文化的側面と、テキストやイメージとしての表象文化的側面の双方に着目することにより、20 世紀に「きもの」がいかにして近代化・国際化を達成したのかを、総合的に明らかにすることを目的とする。

なお研究構成員の分担は次のとおりである。テリー・五月・ミルハブトは 20 世紀の「きもの」の実作品と図案を分析することにより、物質文化としての「きもの」文化を研究する。セーラ・フレデリックは日本と米国の文学作品や大衆メディアにおける「きもの」のテキストとイメージを分析することにより、表象文化としての「きもの」文化の研究を担当する。鈴木桂子は海外を意識して作られた輸出品・観光芸術・土産品としての「きもの」と、それから派生して海外で生産・消費された「きもの」の象徴的意味を研究する。そして森理恵は「きもの」着用者の体験や意識、植民地と「内地」における「きもの」のありかたを研究するとともに、各構成員の研究結果を踏まえ、ジェンダー、オリエンタリズム、ナショナリズムの諸理論を活用し、「きもの」文化の近代化・国際化を総合的に考察する。

研究の方法

- (1) 日本の国内外に保管されている、20 世紀の「きもの」実作品とその図案の調査

- (2) 20 世紀の「きもの」が表象されている出版物、映像資料、貿易品等の調査
- (3) 20 世紀に「きもの」の生産・流通・販売にたずさわった人々、および、20 世紀に「きもの」を着用・消費していた人々より情報収集

研究の実施計画

[21 年度]

- (1) 7 月～8 月にかけて東京(文化学園大学図書館、お茶の水図書館ほか)において資料収集、情報収集をおこなう。
- (2) 11 月に関西(個人収集家ほか)において資料収集、情報収集をおこない、共同研究者間で相互に研究発表、および討論をおこなう。
- (3) 2～3 月に米国東海岸(ボストン美術館、ブルックリン美術館、メトロポリタン美術館、フィラデルフィア美術館)において資料収集、情報収集をおこない、共同研究者間で相互に研究発表、および討論をおこなう。

[22 年度]

- (1) 5 月～6 月にかけて、京都府立図書館、お茶の水図書館、早稲田大学演劇博物館ほかにおいて資料収集、情報収集をおこない、共同研究者間で相互に研究発表、および討論をおこなう。
- (2) 9 月に米国・シカゴ(個人収集家ほか)において資料収集、情報収集をおこなう。
- (3) 10 月に千葉(国立歴史民俗博物館)、東京(文化学園ファッションリソースセンター)、横浜(個人収集家)、大阪(個人収集家)において資料収集、情報収集をおこない、共同研究者間で相互に研究発表、および討論をおこなう。
- (4) 1 月に英国・ロンドン(ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館、大英博物館、ミドルセックス大学ドメスティックデザイン博物館)において資料収集、情報収集をおこない、共同研究者間で相互に研究発表、および討論をおこなう。

[23 年度]

- (1) 5 月にカナダ・アルバータ大学物質文化研究所主催の国際会議 “2011 Conference - Material Culture, Craft & Community: Negotiating Objects Across Time & Place” において研究発表をおこない、各国の研究者と意見交換、情報収集をおこなう。
- (2) 2 月に文化学園大学において、文化ファッション研究機構主催のシンポジウム「20 世紀における「きもの」の国際化ー日本化と脱日本化ー」を開催し、国内の研究者と意見交換、情報収集をおこなう。

研究の成果

[21 年度]

- (1) 個人収集家(大阪)2009 年 11 月
20 世紀の長着、羽織、羽裏、近代の「きもの」に関する絵葉書、雑誌、見本帳あわせて数十点を調査した。
- (2) ボストン美術館 2010 年 2 月
着物 4 点、打掛 4 点、振袖 3 点、襦袢 2 点、絵葉書・浮世絵あわせて数十点を調査した。
- (3) メトロポリタン美術館 2010 年 2 月
着物 1 点、色留袖 1 点、留袖 1 点、間着 2 点、打掛 2 点、長襦袢 1 点、オーバーコート 1 点、額 1 点を

調査した。

(4)ブルックリン美術館 2010年2月

着物、長襦袢、キモドレス等、数十点を調査した。

(5)フィラデルフィア美術館 2010年3月

着物7点、帯2点、ドレス2点、キモノコート1点を調査した。

(6)上記調査を踏まえ、研究発表、討論の成果

日本国内の「きもの」文化には、明治後期から昭和前半期にかけて、「日本の伝統」といった枠組みとは無関係な自由な展開が見られたことがあらためて確認された。米国東海岸のコレクションには、高級品の「きもの」も見られる一方、西洋への輸出向けと思われる、西洋風の刺繍が使われた「きもの」、襦の入ったキモドレス、中国風との折衷、などさまざまなものが見られた。これらについて、西洋の文化が日本の文化から影響を受けた等ととらえるのではなく、日本や米国のさまざまなエージェントが行動した結果の、総体としての「きもの」文化の展開としてとらえる視点が有効であると判断した。

[22年度]

(1)お茶の水図書館・京都府立図書館・早稲田大学演劇博物館 2010年5月～6月

「淑女画報」、「婦人倶楽部」、「主婦の友」、「スタイル」、「キモノ読本」、等の雑誌を調査した。

(2)個人収集家(シカゴ) 2010年9月

着物2点、図案帳15点を調査した。

(3)個人収集家ほか(東京、横浜) 2010年10月

ヴィンテージ・スカジャン、ヴィンテージ・アロハシャツあわせて数十点を調査した。

(4)文化ファッションリソースセンターほか(東京、大阪)2010年10月

モスリン見本帳、着物数点、図案帳数点を調査した。

(5)国立歴史民俗博物館 2010年10月

倉田家伝来の着物19点、単衣12点、帷子1点、振袖2点、羽織2点、被布3点、コート1点、長襦袢2点、丸帯1点を調査した。

(6)ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館 2011年1月

着物5点、振袖2点、襦袢1点、キモノガウン1点、舞台衣装1点、見本帳4点、額2点、壁掛け1点、ゆかた見本一括を調査した。

(7)大英博物館 2011年1月

着物8点、羽織1点、襦袢6点、版画5点、図案帳5点を調査した。

(8)ミドルセックス大学ドメスティックデザイン博物館 2011年1月

図案帳2点、カタログ2点、雑誌1点、書籍4点、壁紙一括、型紙一括を調査した。

(9)上記調査を踏まえ、研究発表、討論の成果

20世紀の初めから中ごろまでの女性雑誌の調査からは、当時の女性たちにより、コスモポリタ的な発想からの自由な「きもの」文化が実践されていたことが確認できた。また、雑誌や文学作品の調査から、植民地において「きもの」は、植民者側から規範的な文化として提示される一方、被植民者側には抵抗や取り込み、戦略的利用など、さまざまな実践が見られることが明らかになった。スカジャンやアロハの調査からは、「きもの」文化の展開の興味深い側面が明らかになった。英国のコレクションの調査からは、「きもの」文化の国際的な生産、流通、消費のありかた、それによるさまざまな変遷が明らかになった。

[23 年度]

- (1) “2011 Conference - Material Culture, Craft & Community: Negotiating Objects Across Time & Place”
 では、共同研究者の各発表に対し、活発な質疑応答、討論が交わされた。とくに、男女双方の着衣であった「きもの」が、20 世紀のあいだにしだいに女性化し、女性の身体に関連づけられていく理由や時期について意見を出し合った。また、日中戦争時の日本軍「慰安婦」が「きもの」を着ることを強制された例については、「慰安婦」は実際にどのような「きもの」を着ていたのか、等の質問があったが、残された資料が証言とわずかな写真であるため、今後の課題であると回答した。
- (2) シンポジウム「20 世紀における「きもの」の国際化－日本化と脱日本化－」においても、共同研究者の各発表に対し、コメンテーターからはあらたな問題提起もあり、活発な質疑応答、討論が交わされた。まず発表者の側から、この共同研究が、何らかの「正しい」(規範的な)「きもの」のありかたを前提とするものではないことを説明したうえで、国内と国外での「きもの」のもつ意味の違い、日本で「きもの」が民族衣装として意識されるようになったのはいつか、コスモポリタニズムの視点で「きもの」を考える場合の有効性と限界について、人々が「きもの」を生活のなかで着てきた具体的な経験をどうとらえるか、などについて話し合われた。いずれの問題についても結論を出すまでにはいたらなかったが、今後、研究を深めていくうえで非常に有意義であった。

主な発表論文等

[雑誌論文]

1. Sarah Frederick : “Novels To See/Movies to Read: Photographic Fiction in Japanese Women’s Magazines,” in *Positions: East Asia cultures*, Winter 2010, pp.728-769, (2010).
2. 森理恵 : 「日本植民地期の朝鮮における「きもの」のイメージ文学・映画などを資料として－」, *国際服飾学会誌*, No.38, pp.21-32, (2010).

[図録]

1. Terry Satsuki Milhaupt : “From Everyday to Extraordinary: Children’s Kimono, Past and Present,” in *Kinderkimonos, Kimonos d’Enfants, Children’s Kimonos: Nakano Kazuko Collection*. Luxembourg: Imprimerie Centrale, SA, (2010).
2. Terry Satsuki Milhaupt : “In the Guise of Tradition: Serizawa Keisuke and his Eclectic Designs,” in *Serizawa: Master of Japanese Textile Design*, edited by Joe Earle. New Haven: Yale University Press and the Japan Society, (2009).

[国際会議発表]

1. Terry Satsuki Milhaupt : “Kimono in the 20th Century: Made Locally, Sold Globally,” in 2011 Conference - Material Culture, Craft & Community: Negotiating Objects Across Time & Place, University of Alberta, 20-21 May 2011
2. Sarah Frederick : “Kimono in the 20th Century: Representation in Japanese and American Women’s Magazines,” in 2011 Conference - Material Culture, Craft & Community: Negotiating Objects Across Time & Place, University of Alberta, 20-21 May 2011
3. Keiko Suzuki : “Kimono in the 20th Century: Selling ‘Japan’ to the West,” in 2011 Conference - Material Culture, Craft & Community: Negotiating Objects Across Time & Place, University of Alberta, 20-21 May 2011

4. Rie Mori : “Kimono in the 20th Century: The Perception of ‘Kimono’ in Japan's Colonies,” in 2011 Conference - Material Culture, Craft & Community: Negotiating Objects Across Time & Place, University of Alberta, 20-21 May 2011
5. テリー・五月・ミルハプト: 「“Kimono” 今昔: 国内と国外の観点とその変遷」, シンポジウム「20 世紀における「きもの」の国際化ー日本化と脱日本化ー」, 文化学園大学, 2012 年 2 月 18 日
6. 鈴木桂子: 「「キモノ」文化が海外を廻る: 輸出品、アロハ、スカジャンの一考察」, シンポジウム「20 世紀における「きもの」の国際化ー日本化と脱日本化ー」, 文化学園大学, 2012 年 2 月 18 日
7. セーラ・フレデリック: 「「キモノ」のコスモポリタニズム: 女性雑誌小説を中心に」, シンポジウム「20 世紀における「きもの」の国際化ー日本化と脱日本化ー」, 文化学園大学, 2012 年 2 月 18 日
8. 森理恵: 「「きもの」の近代化と植民地主義」, シンポジウム「20 世紀における「きもの」の国際化ー日本化と脱日本化ー」, 文化学園大学, 2012 年 2 月 18 日

[学会発表]

1. 森理恵: 「植民地における「きもの」イメージ」(口頭発表), 国際服飾学会第 29 回大会, 2010 年 6 月 19 日
2. 鈴木桂子: “Selling “Japan” to the West: Kimono Culture in the Twentieth Century,” 国際日本学会 (IAJS) 第 7 回 研究発表大会, 2011 年 10 月 29 日

[口頭発表]

1. Terry Satsuki Milhaupt : “Making the Foreign Familiar: Serizawa Keisuke's Eclectic Designs,” the Japan Society, New York, 2009.10.
2. 鈴木桂子: 「明治浮世絵は海外出兵をどう描いたかージェンダーとエスニシティーの視点から考える」, イメージ&ジェンダー研究会, 2010 年 8 月 7 日
3. 森理恵: 「日本統治下の朝鮮における「きもの」の表象ー文学、映画、証言からー」, イメージ&ジェンダー研究会, 2010 年 8 月 7 日

参考文献

1. 横林結、森理恵: 「洋裁・洋装の普及と「和服」ー1950 年台にける「直線裁ち」の意味ー」, 京都府立大学学術報告生命環境学, No.61, pp.9-17 (2009)
2. 東朋美、森理恵: 「日常的着物着用者(女性)の着物着用実践のありかたと着物に対する意識」, 京都府立大学学術報告生命環境学, No.60, pp.1-19 (2008)
3. 森理恵: 「「キモノ」の洋装化と民族衣装「キモノ」の成立」, 武庫川女子大学関西文化研究叢書, No.7, pp.96-122 (2008)
4. 森理恵: 「キモノの女性化、ファッション化と民族衣装化」, 愛媛県歴史文化博物館展覧会図録『とさめぐファッションー小町娘からモダンガールまでー』, pp.114-119 (2006)
5. 森理恵: 「「キモノ美人」成立過程についての研究ー「日本美術史(染織史)」の形成と日本画、和装界の動向ー」, イメージ&ジェンダー, No.3, pp.76-95 (2002)
6. Terry Satsuki Milhaupt : “In the Guise of Tradition: Serizawa Keisuke and his Eclectic Designs,” in *Serizawa: Master of Japanese Textile Design*, edited by Joe Earle. New Haven: Yale University Press and the Japan Society, (2009).
7. Terry Satsuki Milhaupt : “Facets of the Kimono: Reflections of Japan’s Modernity (Facetten des

Kimono im Spiegel der Moderne),” in *Arts of Japan: The John C. Weber Collection*, edited by Melanie Trede with Julia Meech. Berlin: Museum of East Asian Art, National Museums Berlin, (2006).

8. Terry Satsuki Milhaupt : “Second Hand Silk Kimono Migrating Across Borders,” in *Old Clothes, New Looks: Second Hand Fashion*, edited by Hazel Clark and Alexandra Palmer, Oxford and New York: Berg Publishers, (2005).

9. Sarah Frederick : *Turning Pages: Reading and Writing Women's Magazines in Interwar Japan*. Honolulu: University of Hawai'i Press, (2006).

10. Keiko Suzuki : “The Making of Tōjin: Construction of the Other in Early Modern Japan.” *Asian Folklore Studies*, No.66, pp.83-105, (2007).

11. Keiko Suzuki : *The Tale of Tōjin: Visualizing Others in Japanese Popular Art from Edo to Early Meiji*. UMI (ProQuest), (2007).